巻頭言

質的研究について

山梨大学看護学会会長　**大山　建司**

看護研究の中では，質的研究が注目されてきており，にわか勉強で質的研究に関する書物を数冊読みました。質的研究は量的研究に対比されて使われていますが，これらは相対するものではなく相互補完的なもののようです。医学研究には自然科学研究と人間科学研究がありますが，一般的に質的研究は人間科学研究に用いられています。しかし，自然科学研究の中にも質的研究に類するものは多くみられます。質的研究における人間の行為の精神心理的内面を理解することと，様々な条件下で動物の行動を理解することに大きな違いはありませんし，個々の病気の症状とその原因の追求、遺伝子型と表現型の差異の研究なども量的研究というよりは質的研究に近い考え方に基づいています。脳科学の急速な進歩は、精神活動と行動の関係を科学的に解明してきており，将来心の動きが化学反応として解明される可能性も否定できません。量的研究は，主として統計学的手法を用いる研究で，保健･予防医学的研究に多くみられ，その研究結果は質的研究の糸口にもなっています。

看護における質的研究は，人間の行動を観察し，その背景を理解･解釈することによって，人間を理解し，医療に役立てようとするものと考えます。しかし，同じような条件下にあっても人の行動は多様で，個々人の内面の理解は必ずしも一般化できるものではありません。また，研究者の知識･レベルによっても研究の質は大きく左右されます。行動がいかなる精神活動に基づいてなされたかを解釈し，それを他人に納得させるためには，多くの可能性を考えて解釈の過程を明確にしていかなければなりません。質的研究のはじめは，すぐに医療に資するものではなく，繰り返し研究を重ねることによって，研究者自身の人間的向上と研究方法の活用法・理解分析力の向上に役立てるものと思います。

鋭い観察力によって行動の内面を洞察することは，一朝一夕にできるものではなく，質的研究には人間観察における日常の訓練･勉強のみならず，社会的(地域的)背景，成育環境など，あらゆる側面から人を多面的にとらえることのできる技量と知識が要求されます。そこに質的研究の難しさがあると思います。